

むかし、昔、籠山の南側に、佃山があつてな。その山には、たちの悪い、いたずらぎつねが住んでいたと。村人たちはみんなだまされて、ひどい目にあっていたと。

ある夕方、生井村の甚兵衛さんは、町でいっばいにしんを買って、家に帰る途中、佃の山道を通ったと。するとな、不思議なことに、大きな川が目の前にあらわれた。家に帰るには、どうしても、その川を渡らなければならなかったと。驚いた甚兵衛さん、

「どっかに橋はないかなあ、橋はないかなあ」

と、きよろきよろ見まわしたんだが、橋はなかったと。仕方がなく、背負っていたにしんのふるしきを、首に結んで、裸になって、川を渡ることにしたんだと。川の水は、腰の上ほどもあつてな、

「おお深えなあ．．．おお深えや」

と、大声をあげて川を渡っていると、とげのある水草が、すねやももにからみついて、

痛いこと、痛いこと。

「おお、痛え、おお深え、おお深え、おお痛え」

と、泣きながら、川を渡っていたと。すると、どこからか

「甚兵衛どん、甚兵衛どん。あんた、何しているんだ」

と、声をかけられた。

「ハッ」と気がつく、今まであった川は、どこにもなくて、裸で、野バラのやぶの中に、立っていたと。首に結んでいたふるしきは、ぼろぼろになり、いっばいあったにしんは、半分ぐらいになってしまっていたんだと。

また、ある秋に、権助じいさんは、佃の山へ木の葉さらいに行った時のことだ。何だか眠くてしかたがないので、山の日なたでひと寝入りしていたと。すると、

「おじいちゃん、つかれたんべえ。さあさあ、湯にでも入ってくんろ」
と、孫の嫁が言うもんだから、

「どれどれ、それじゃあ、ひと風呂あびっぺえがなあ」

と、風呂に入った。

「ああいい湯だなあ、ああいいあんべえだ」

と、いい気持ちでいると、

「権助どん、権助どん。何しているんだ。きたねえぞ、くせえぞ」

という声に、驚いたと。権助爺さんは、山畑のしもごえ溜ために入っていたんだと。

それからな、この悪ぎつねは、ごちそうすると言って、うどんに見せかけて、ミミズを食べさせたり、甘い黒玉と言って、うさぎの糞くんを食べさせたりしたと。そして、時には、人間に化けて悪さをし、人々をこまらせたんだとさ。

おしまい